

「山中福よ先生について」

今になって考えてみると聾学校にいた頃は一度も「戦前にこのろう学校でりっぱな聾教員がいましたよ」という先生方の口から出なかった。私の母、聾年配者からは、よく聞いたけど半信半疑だった。（やはり、宮城県立聾学校の創立記念誌は每五年ごとに刊行したページの中で必ず、山中福よ先生と一緒にいた生徒の写真を載せていた。きりっとした眼差しから愛情を注いで教えた聾生徒を我が子のように可愛がっていただいていたのだと伝わって感じた。

今から数えると82年前で1919年（大正8年）10月から1937年（昭和12年）3月まで18年間で宮城県立盲聾学校にて訓導（道徳・作文）という正式の教員となる辞令を受けたきっかけは夫であった山中忠太郎さんは聾者で訓導の資格を得た日本で最初の方であり、宮城県立聾学校の教務主任をしており、結核の為に休職しました。山中先生は夫を看病しながらも、学校・寄宿舎へ行きまわったり、当時卒業生だった二人に山中先生自身の要望で補助教員をお願いした。

●山川 廣先生（算数・体育・図画・手工）宮城県立聾学校卒 正式採用試験を受けた。
加藤 常太郎先生（大工） 宮城県立聾学校卒 採用試験を受けない。

当時でこの三人も聾教員がいたのだから、生徒がのびのびと手話中心で「毎日学校に通うのが楽しかった！」と・・・聾年配者がよく話をしていたのがわかるような気がしました。

聾年配者たちからの思い出話によると今も山中先生を慕っている様子でわかります。

「山中先生の名前を『天然パーマだからクルクル』と手話表現していた」
「ウソやでたらめを言った生徒は朝から昼間まで廊下に立たされたり、しつけが大変に厳しかった」
「毎朝、生徒の一人ずつに日記を書かせ集めて赤いペンで校正してくれた。山中先生に教えて頂いた作文を書いたのを父に見せたら誉めてくれたので先生のことますます好きになった」
「作文・筆談を厳しく教えて頂いたおかげで今、健聴者との会話、役所へ書類提出時など役立っている」
「口話だけで、なかなかコミュニケーションの力がつかないね」と言われた聾年配たちが書いた文章をちらりと見たら、字も上手すぎてお手上げした私
・・・
又、聾年配女性が「山中先生は子供を欲しがっていたけど恵まれなくて・・・

代りに私たちを可愛がっていたのでしょね」

「ろう教育に口話法が入ってきた頃、山中先生は首を切られた。又山川先生も加藤先生も退職した。山中先生が辞めた時は在校生、卒業生そろって仙台駅まで見送った。「東京に遊びにおいで」と言われて・・・先生が亡くなった時は秋田まで遺体に付き添って葬儀に加わった。今でも命日に秋田へ御墓参りに行っている」

先月にて宮城聾史研究倶楽部メンバーたちは秋田へ故山中先生の墓参りに行って来たが、墓の廻りは花、線香も供えてあったのを見て嬉しく思っ帰ってた。(秋田市・順応寺)

ある人から「山梔子の花」本を見せて頂いたら、山中先生の生い立ちのことを自分で書き込んでいたし、松本敏子さん(山中先生の息女{養女})自身も母の思い出・俳句も心を込めて表しています。この本は非売品のようで・・・松本さんが生前母に本をつくってあげる約束したが、本格的に母の二十三回忌時で作り上げました。「山梔子の花」は山中先生の好きな花であり母校東京聾学校(現在の筑波大学付属ろう学校)の校章は山梔子の葉を形どって最初で同校の校友会の雑誌に「くちなしの花」と題名をつけて編集したのは山中忠太郎先生でした。

しかし、松本さんは2年前にお亡くなりになりました。当時、宮城県立ろう学校の田島先生も宮城県立聾学校の創立80周年記念誌作成担当に当って山中先生という聾教員に魅せられて記念誌のための資料を貸してほしいと手紙を出したが、返事が来なくて2・3回も出したらやっと来た以来で電話も交わしていた。たまたま、松本先生が用事あって仙台に来て話し合えた。田島先生が山中先生の退職の事情を尋ねたら「教え子は可愛いので、ずっとつきあいが続いたが、仙台には恨みのような気持ちを持っていた。退職させられたのだ」とはっきりと答えた。松本さん自身も川崎ろう学校の教師をやっていたそうで小さい時から母さんの影響を受けたのでしょ・・・。

一山中 福よ先生の生い立ち一「山梔子の花」より

①幼き頃

明治27年9月16日神田区新銀町(現在は??)で薪炭商にて生まれた。上に兄が二人、小僧もいて数年後に引越した。この家は蔵があって、使わない食器、三月のひな人形、五月の武者人形、客の寝具等保存してあった。屋上は広々で七月の両国の川開きの時は美しい花火が見られた。

②学生時代

数え年葉八歳で尋常小学校に入学し、楽しく通学していつもは、袴姿だった。ある日頭が痛くて数日後も「頭が痛い!」と・・・やっ意識が戻っておさまったが、何も聞こえなくなった。医者からは「もうだめだ」と言われて両親がびっくりして以後5年間、名医に連れてまわっても色々な神様や仏様にも連れまわされたけど全然聞こえない。女の友達「つんぼ、つんぼ」といじめるので遊ぶのをやめて五年間男の子とめんこ、べいごま、こままわし、凧上げも得意だが、人形やままごとなんて遊ばなかった。男の子から「つん

ぼ」なんて一度も言われてなかったし、「この子は耳が聞こえないからね」と仲間に入れてくれたし、兄たちも応援してくれた。
13歳で母に連れられて官立東京盲啞学校へ行った。そこで手まねを一度も見ることがないので顔をしかめたり百面相ような手まねを見て可笑しくてたまらず大声で笑ったら母さんが「おまえと同じ人だから笑っちゃいけない」とたしなめられた。4年生の教室に入り遠山先生にお会いし、その時で黒板に書いてあった国語のうつつしを読めたら読んでみなさいと言われたら、全部読み終わった。あの当時で「少女の友」や「少女世界」の雑誌を愛読していたから、すらすら読めたようです。
大正になって、師範科卒業後も母校の教員として勤務していた。

③結婚

大正7年6月10日に母校の教員を「辞め、1週間後の17日に宮城県立盲啞学校ろうあ部教員山中忠太郎氏と滝野川の三浦浩先生宅にて結婚式を挙げ7月11日より夏休み入り夫婦で松島の宮戸島に1ヶ月余り避暑に行き、2学期開始したが、忠太郎さんは身体に異状を来し、肺結核で休職に入った。夫の看病と公務に励み、目が廻るほどで・・・手を尽くしたが、大正15年11月22日亡くなってしまった。（忠太郎さんは秋田の旧家山中家の長男として生まれ、幼児期に中耳炎のため、聾になった。学問の道が捨てられず、当時の秋田県知事森氏に知遇を得て東京盲啞学校の師範科を卒業し、その後は小樽盲啞学校に勤務して1年後、宮城県知事に移られた森氏の勧めで宮城県立盲啞学校の創立に携わった。福よさんは在学中から忠太郎さんを見知っており、十歳ほど年上で年輩にあこがれの想いを抱いていたようです。24歳で幸せいっぱいだったが、33歳で未亡人になってしまった）

④宮城県立盲啞学校から松本の私立聾啞学校へ

昭和12年3月、赤木校長時代に口話法が導入されて受持ちが手話学級のみになったため止む無く退職になり、20年住みなれた仙台を離れ、杜の都という仙台は思い出多い町で、第二の故郷のように思っているようでした。9月頃松本の私立聾啞学校の小岩井先生より経営が苦しく、病気も困っているのので「松本に来てほしい」と言われて行くことになった。松本聾啞学校は当時、日本でただ一つだけの手話による学校であった。（昭和12年現在）

⑤母のこと

亡き母福よさんは男勝りの意志の強い方で師弟間の心の交流はとても深く、遠い昔の仙台の教え子たちと絶えず親しく死ぬまで交流しました。その反面小さい時からわがままに育てられ、才媛とかよく言われていたらしく、非常に誇り高く私の強い人でした。昭和33年4月、脳出血で倒れ、それ以来転々とした入院生活にてはるばる仙台から、松本からと多くの人たちが見舞いに来てくれて喜んでいました。（五月の連休に松本の卒業生が20数名、一度に病院に来た時は病院の方々をびっくりさせたそうです）
・・・10月24日の深夜、息を引取ったが、最後はほとんど聞き取れないほどの息遣いで安らかに満77歳でした。

● 「創立二十五年記念誌」の中から

宮城県立盲啞学校の最初の記念誌に山中先生の五首の短歌が載せられている。・・山中先生は首を切られ泣く泣く仙台を去ったので・・心底に何を思っていただろう。

◇二十年餘り親しみし
學舎を退きて

東京（舊職員） 山中 福代

○ 培ひし撫子の花の咲く園を

名残惜しみてわが去り行くも

○ 二十とせをわが住みなれしみちのくに

今宵別れむ去り難たけれど

○ 列車の窓へにまたたつどひ來て

別れ惜しめり子等の愛しも

○ 後妻ひかれつ去りぬ涙もて

我を見送る教へ子を後に

○ 苦しみも悩みもなべて己が身に

秘めてさびしくわれ去り行かむ

x x x

右は本校創立の際、最初に發令された職員
故山中忠太郎氏の夫人で、永く本校塾唖教
育に盡くされた山中福代先生が、昭和十二
年四月、御退職上京される時、その感懷を
詠まれたものである。



山中先生 ① ▲ 卒業記念(昭和4年)



② 大正7年6月17日
山中忠太郎と結婚



③ 大正13年8月
松島月浜にて



④ ▲ 授業風景(昭和9年) 山中先生

① ④ → 創立80年記念誌より

② ③ → 「山くちなし」より